

第1章 外国人探検家

歴史一般やイエメンの歴史そのものに対する古代史や近代史の研究は、生命の数々の秘密の中のどんな秘密の研究の重要性にも劣るものではない、という事は疑いもないことである。歴史には教訓や戒めが存在し、その歴史を深く学び、その出来事を掘り下げ、それらの出来事の原因やそれによって引き起こされた事を理解することは、共同体を歴史の道程や傾向、つまり諸地域の興隆や衰亡—これららの事象は人間が影響したり、影響されたりしたことなのだが—それらのものへと正しく導く。

このような事から東洋学者や科学者の中の研究先駆者達は、イエメンの歴史とその古きものに興味を持ったのであった。

イエメンに達するために、困難を受け入れ、危険を冒し、大洋を渡った。彼らの旅は、価値ある成果をもたらし、また多くが、目的に達する前に生命を失った。

そこで歴史の本題のテキストに入る前に、東洋学者やアラビア人達の研究先駆者達の方へと、少し脇道に逸れてみる価値はある。そうすることで私達は彼らが行ったことや、その上で実現したことを知ることが出来よう。その先駆者達というのは・・・

フランス人 ド・ラージェル・ルーディー少佐

イエメンへの外国人使節の最初は、ヒジュラ歴1124年（西暦1712年）フランス人のド・ラージェル・ルーディー少佐であった（注1）。

（注1） 1958年エジプトのルネッサンス書房より出版された書籍「古代アラビア史」に含まれた一章、ドトルフ・ニールセンに関する章よりの出典。

その使節は商業の名目の元で、当時イエメンの主要な港であったモカの町へ到着した。アルマワーヒブ（注2）の領主であったイマーム・ムハンマド・ブン・アハマド・ブン・アルハサンは使節が到着したことを知るや否や、モカの彼の知事を通して、使節に対して彼の治療のために使節の医者を彼の元に派遣することを要求した。

そこで使節は、彼の元、即ちアルマワーヒブの彼の宮殿へ1人の医師を含む沢山の使節のメンバーを派遣した。そしてその医師は、彼の宮殿でまる1ヵ月間滞在した後、彼の治療に成功した。

使節はその滞在の間、イマームの饗応を受け、また彼の謁見をも受けた。それから使節はモカへ戻り、そしてモカからフランスへと帰って行った。使節は、イマームの宮殿の状態について研究することや、宮殿で行われていることに関心を持っていた。

また使節はイエメン人達の習慣について彼らの宴会やお祭りや葬儀を通して、精通していった。しかし使節は他の使節が行ったように、イエメンの歴史や、その中の遺跡の文書については、決して関心を持たなかった。

(注2) ザッマールの町から東へ10km離れた近郊の村であって、イマーム・ムハンマド・ブン・アハド・ブン・アルハサンが住んでいた。彼はアルマワーヒブを居城とし、彼の国家の中心地としてそこを採用していた。死後彼はそこに埋葬された。アルマワーヒブは消え失せたが、しかしその遺跡は依然として残っている。「アルイエメン・アル・クブラー（大イエメン）」アッサイド・フセイン・ブン・アリー・アルワーシー著 P.54

デンマークの旅行家カールステン・ニーブール

デンマーク王フレデリック5世（注3）のイエメンへの使節は、イエメンの絵画や彫刻、考古学的刻文に関心を持った初めてのアカデミックな使節として考慮されている。

(注3) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.1

この使節は1761～67年のニーブールの使節団として知られ、イエメンの歴史的情報を沢山提供することとなった。ニーブールは使節団の長ではなく、単なる将校であったが、彼は運命的に生き延び、任務を遂行し、1767年にデンマークへ貴重な情報をもたらし、戻ることが出来た使節の唯一の人物だった。

この使節団は、5人で構成されていた。彼らはオリエント学者のカールステン・ハウベン、博物学者のベター・フォースコル、前述の使節団将校のカールステン・ニーブール、医師のカールステン・カール・クラマル、そして画家のゲオルグ・ヴィルヘルム・ヴァーレンファインドである。

彼らはカールステン・ニーブールを除いて全員が、イエメンに着く以前に、自分達の任務を遂行する前に死んでしまった。（訳者注：ニーブールの著作に依るとイエメン着後の死亡者がいる）カールハディー（アルアッバース・ブン・アルマンスール・フセイン）でバイト・アルカーシム（カーシム家所領地）のイマームの一人であった。ニーブールは、これらの調査の結果を『ニーブールの旅行』という題名で独語の書物として記録した。また『豊穡なアラブ百科辞典』の中に掲載されているように、彼の死後第2巻（注4）そして第3巻が出版されている。

(注4) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.3

U. E. シチィズン博士

西暦1810年、（U.E.シチィズン博士）がイエメンに到着した。そして彼は（ザッマール）の町の近くでヒムヤル語の5枚の刻板を発見した。その刻板は既にニーブールが指摘し、探し出し写しておいたものであった。

しかし彼がイエメンを訪れていた間、つまりイマーム・マンスール時代（アリー・ブン・マハディ・アッバース）に、政治的状況は混乱しており、安定したものではなかったため、彼の旅は全く自由に、イエメンを巡り歩くことが叶わず、前述の5枚の刻板を運び出すことで彼は満足しなければならなかった。だが彼はその他、自署名入りの優れた絵画、書面、書物、論文等（注5）を残した。

(注5) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.6

イギリス人中佐 ウォルステッド

この人物はイエメンのハドラマウトに直接西暦1834年に到着した。それからその翌年に再度、そして最後の旅となったが、彼はハドラマウトへ到着した。彼は東のバールハーフを旅してまわり、上に砦の築かれていた黒岩で、「カラスの砦」の刻文を発見した。この古代の刻文は、10行で書かれ、最初のテキストの形態を備えたものであると考慮されており、その日付は640年にまで遡る。

同様に、ウォルステッドは、ハドラマウトの西のマイファをも旅してまわり、そこでマイファの町の遺跡を発見した。そこは現在、サカブ・アルハジャルと呼ばれる町である。

彼はそこから「サカブ・アルハジャル」の刻文として研究者達の間で知られている刻文を持ち帰った。

学者達の研究は、以下のことを既に証明している。ハドラマウトのこの地域が高度な文明を持つ国であったこと、そこに現存する城壁の残骸は、インド、ハドラマウト間の陸上商業ルートの防衛の為に過去に建設された古代の築城の名残りであろうということ、そして古代の商業都市であり、「カーニー」の名で有名な町は、その残骸が今日では「カラスの砦」という名で知られているところのものか、或いはそれは、「カラスの砦」から近い場所にあると思われる、ということ。 (注6)

(注6) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.7

二人の英国人旅行家 ヒルトン、クリトンダン

この2人の旅行家はイエメンの海岸に、沿岸艇サイズのイギリス船に乗船し、1836年に到着した。そしてそこからサヌアーへと分け入り、ヒルトンはかの地で死去した。一方クリトンダンは自国に帰り、サヌアーで発見したサバア王朝の5つの刻文を発刊した。しかし前述の刻文を発見した場所を規定してはなかった (注7)

(注7) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.7

ドイツ人旅行家 アドルフ・フォン・フロイデ

この人物は1843年にハドラマウトに到着した。彼はマッカラの港からハドラマウトに入った。バハル・アッサーフィの名で知られる砂漠を、ドーインを経由してアルアハカーフ砂漠から越えた後、マイファア平原東部に到着した。ワーディー・アブネの名で知られる涸れ川において、古い壁の残骸を発見した。それには5行から成るハドラマウトの刻文が刻まれていた。これは現在考古学者達の間では、「アブネ刻文」 (注8) で知られている。

(注8) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.8

フランス人 ユーセフ・アーノルド

前述の年西暦1843年、フランス人のオリエント学者ユーセフ・アーノルドが、トルコ大使館の医師としてサヌアーへ到着した。そして彼は、塩の取引きをしていたマアリブのキャラバンがサナアからマアリブへ帰るのに同行した。その時彼は金を払ってキャラバンのメンバーの一人の保護のもとに身

をおいた。

そして1843年7月12日にマアリブに到着した。マアリブの首長は彼を厚く迎え、彼がそこにある遺跡の地域、即ち古い城壁や人々が「サバの女王の聖域」とか「サバの女王神殿」と呼んでいるマクフ（月神）殿へ行くのを援助した。

既に彼はマアリブへ入る前にダム（注9）のデッサンを終えていた。同様に、多くの刻文も写生していた。そして前述したキャラバンに同伴して、サルワーフ（注10）を通過してサヌアーへ戻る時、彼は多くの彫刻を運び出すことが出来た。そして前述の年7月25日に彼の旅行からサヌアーへ戻ってきた。

この事〔彼が戻ったというニュース〕と彼がマアリブとサルワーフで得た56点の刻文—これらの刻文は、ジッダにいるフランス領事ファルスイルのもとに届いた。そして彼は自分の役目として雑誌「ジャーナル アジアティック」へそれを送り、1845年に刊行された（注11）。

(注9) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.11

(注10) サルワーフはフーラーン・ティセール（フーラーン・サヌアー）とマアリブの間の町。マアリブがサバア王国第2番目の首都になる以前の最初の首都。

(注11) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.11

イギリス人 ロフトース

イラクのバビロニア地方における英国発掘作業で活動していたロフトースの召使が、かの地のワルカーウの近くで、乗っていた馬が躓いた折にその事は起こった。

彼は墓の中でヒンタシル・イブン・イースーと呼ばれる人物に関する重要な南アラビアの刻文を見つけた。この出来事は1850年のことであり、学者達はこの刻文から多くの利益を得ることとなった（注12）

(注12) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.11

イギリス人将校 コグラン

このイギリス人将校（注13）はサバア王朝の銅製板の一群を手に入れた。また同時期に大英博物館はマアリブから幾つかの石塊を得ている、また約40程の考古学上の刻文の断片を得ている。

英国人のアーネスト・オーサンダーがこれらの刻文を解説し、コグラン死亡の1年後の1864年にこれらを発刊している。

(注13) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.11

東洋学者ヨセフ・ハーリーフィー

著名な東洋学の教授であるヨセフ・ハーリーフィー（注14）は、フランスの芸術学院から委任を受けてイエメンへ到着した。それは1870年のことであった。

(注14) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.12

彼はユダヤ人だったが、イエメンにおけるユダヤ人達が、イエメン国内をいかなる被害をも被ることなしに移動する自由を享受していた時であった。非武装であることにユダヤ人が反対しない事に対して（ユダヤ人の行動の自由と保障を認めたのは）「アラブの俠気」が求めたところのものによる。ハーリーフィーはこの寛大な慣習を利用し、イエメンの何人かのユダヤ人に連絡をとり、貧しいユダヤ人の服を身につけて、完全に自由にイエメン国内を巡ることができた。

彼にはハブシューシュという名の1人のユダヤ人が同伴した。彼は多くの考古学的刻文を、マーリブ、ジャウフ、ナジュラーン、サルワーハから運ぶことができ、またサヌアーへ無事に2人とも戻ることが出来た。

ハーリーフィーは、少なくとも86の刻文を持ってフランスへ帰国したが、彼はそれらを上述の場所のうちの、或いはそれ以外の37の場所から収集した。そしてそれらを、彼の旅行についての報告書及びそれらの翻訳と共に、西暦1872年に公刊した。同様にハーリーフィーは、前述の年の後の何年かに自分が発見した刻文の数々についての研究を公刊し、当時有名であった多くの刻文を再考した。

ドットルフ・ニールセンは、「科学の歴史と物質に対する観点」というタイトルで書いた章の中で、これは別の4章と共に刊行されているが、前述の4人の東洋学者に次のように語っている。この言葉はフワード・フスナイン博士が彼の著書「古代アラビア史」の巻末に記しているが、それは次のようなものである。

「この旅行の科学的な価値は、公にされた刻文の数量的観点からでなく、新しい知識の観点から見なければならない。（その新知識とは）刻文がもたらしたものであり、我々がそれによって非常に文明化されながらも、秘匿された民族の高度な文明があった事を知ったことである」（注15）

[\(注15\) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.14](#)

偉大なる東洋学者 エドワルド・グラッツェルのイエメンへの旅

西暦1882年、オーストリア人の東洋学者で、アラビア語の教授であり、オーストリアのウィーンにある観測所の天文学者でもあったエドワルド・グラッツェル（注16）が、パリのフランスアカデミーより委任されて、イエメンへ到着した。彼はイエメンの北部を1882～84年の間に、3回旅することが出来た。最初の旅は、サウダ地方からハッジヤ地方までのものであって、その旅において彼は、その地域でトルコの担ぎ屋を同伴し、その地域の外観を見渡した。

[\(注16\) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.17](#)

第2回目の旅は、イエメン人の幾人かのグループと共にシバーム、カウカバン、ハッジヤ及びイムラーンへの旅をし、その旅行で彼は、その地域における考古学的な遺跡や刻文をチェックした。

第3回目の旅は、アルハブ地方の部族の幾つかのグループを伴っていたものであった。そして彼は、フランスアカデミーに3つの旅行の結果をもたらすことが出来た。その結果というは、サバア王朝の4つの刻文に要約されるであろう。彼は刻文が書かれた数々の石板を発見しており、その数は280近く

にのぼるものであった。また彼は自分が見た刻文を写すことも可能であった。そしてヤンバールジュ博士が、フランスでサバア王朝の刻文に関する記録の中でその幾つかを公表した。

そして1885年グラッツェルは4回目の旅行を遂行するためにイエメンに戻った。そしてイエメンのザッファール・ヤリームやザッマールの近くにある遺跡の地域やラダーイにおいてヒムヤルの刻文を、そしてジャウフにおいてマアーン王朝の考古学的な刻文を手に入れた。彼がこの旅行中に手に入れた刻文の数は37点で、それらは全て大英博物館に帰属されている。

彼は1887～88年の2年間にイエメンへの第5回目の旅行を行った。彼はアラブのイスラーム法学者の着物を着、彼の友人達のグループと共にマアリブへ着いた。彼らの中にマアリブの名族の一人がいた。今回、彼はマアリブにも6週間滞在した、その間に彼はマアリブ・ダムにある古い水路の跡をスケッチした。また実り豊かなサバアの源であり、そしてその文明と発展の諸要因の中で最も大きな理由であった偉大なるダムの跡をスケッチした。そしてグラッツェルは40にものぼるサバアの刻文を他の遺物の断片やお金や印章、その他と共に伴ってこの旅行からヨーロッパへと帰った。そしてそれらを全てベルリンのドイツ博物館に集めた。

それからグラッツェルはこの旅行の後、刻文の研究とその解明に熱中した。そしてグラッツェルは1892年再びイエメンへ—彼の第6回目—でそして最後の旅行—戻った。それはプラハのアカデミーの援助によるものであった。

しかしながら当時のイエメンの政治状況は、トルコに対するイエメン人達の革命の理由で、イエメン内を自由に旅行することを彼に許されなかった。しかし彼は拓本の仕事に従事した。即ちそれは、彼が以前に彼らに教えた方法、つまり部族の人達を通して、刻文の上の紙に写すというものだった。そして彼はその彫刻を手に入れる為に、彼らに金銭的報酬を増やした。それによって彼は遺跡のあるジャウフの町から多くのマアーン王朝の刻文を手に入れた。

それと共に、同様に「勝利の刻文」として考古学者達に知られているシルワーフの著名な刻文を得た。その刻文には、1000語以上、100行近いものが刻まれている。

このグラッツェルのイエメン旅行の成果の中には、40にも及ぶ刻文、古代イエメンの貨幣のコレクションがある。これら全ては、オーストリア、ウィーンの世界歴史博物館に所有され、公開されるようになり、研究者の手が届くようになった。

一般的に、グラッツェルのイエメン旅行は南アラブの国—即ちイエメン—への諸旅行の中で、他のどの旅行よりも古代イエメン史の研究者達に多大の利益をもたらした。それは彼の任務に対する科学的な準備、更には作業に取り掛かる前に目標を限定したことのおかげであった。また加えて、彼の柔軟さと頑固さ、イエメンで過ごした長い滞在期間、そしてイエメン人達から多くの友情を得ることが出来たおかげであるとも言えよう。

なお、2人の旅行者、デンマーク人のニーブルとフランス人ハーリーフィー、またレベル的には彼らよりも低かったが、その他の研究者達やその後の多勢の人々が調べてきた偉大な結果を忘れてはならない。そして神は、東洋学者グラッツェルに、彼が最後のイエメン旅行から帰った後にも、研究の

ための自由でそして十分な時間を与えたのであった。

オーストリアのアラビスト シジュファランド・ランジャー

同様に、1882年に初めてグラッツェルがイエメンに到着した年、オーストリアの首都ウィーンから若きアラビア語の専門家、シジュファランド・ランジャー（注17）がイエメンに到着した。ランジャーは早速ジャフラーン村近郊で、ヒムヤル語の大きな刻文を発見した後、ダーフ村（ジャフラーン地方の村の1つ）の近郊の遺跡に辿り着いていた。ダーフ村は以前、前述のニープールが指摘した場所であった。

（注17） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.17

彼はそこ（ダーフ）よりサヌアーへ行き、サヌアーで2個のヒムヤル語刻文を写しており、その後ホダイダ経由でアデンへ移動している。アデンでは、破壊されていたにもかかわらず、古ハドラマウト方言を含む、言語学上重大な数多くの刻文を写している。最終的に、アデンから偽装し、危険を冒し北部イエメン地域に足を踏み入れた。しかしグラッツェルの調査が証明しているように、パナーの枯れ谷で泳いだ折に殺害された。生前に、無事ウィーンに送っておいだ22点の刻文は没後出版された。

旅行家 クラーセル

1893～94年の間イエメンへ旅行したクラーセルという旅行家がいる。しかしながら彼の旅行の成果に関しては我々は何も知らない。彼の旅行に関しては、前述の「古代アラビア史」の中において公表されている、碩学のフランツ・ホーメル博士がカタバーン王国の刻文に関する研究について書いた「南部アラビア諸国概説史」と題する章の中でのみ彼の名は知られているだけである。

オーストリアの二大旅行家 H・ミルラー博士とK・リンドバーク博士

西暦1898年、オーストリアのウィーンアカデミーは、イエメン文明と遺跡の科学的研究継続のために、H・ミルラー、K・リンドバーク両博士（注18）を派遣した。

アカデミーはスウェーデン船籍の汽船ジュンフリイド号を派遣団のために特に借り、派遣団はその船でイエメンの海岸へと向かった。しかしイギリスが派遣団に対してアデンからイエメンに入国することを許可せず、派遣団はアデンを出航し、東へと向かった。派遣団は東のある港に上陸した。そこはまだイギリスの支配が及んでいない地だった。そこからハドラマウトへ通り抜け、シュブーフ近くにある遺跡を訪れることが出来、前述の「アルハジュール」刻文「オブネ」刻文「ハスヌ・アルゴラーブ（カラス砦）」刻文の拓本をとった。

同じ年の1月（シリア、イラクではカーヌウン・アッサーニー月に当たる）に派遣団はソコトラ島に着き、かの地やメヘラ、そして残る近隣地においてその方言を研究し、後にその研究を出版した。

ミルラー博士は多くの刻文を発表し、その規則に関心を持ち刻文の時代分類を試みた。

ほかのイギリス人研究者達（注19）は、遺跡に関する知識の増大に貢献した。その研究者達とは、ファン・デン・バーグ、J.B.ハリス、レオ・ホルシュ、カール・リンドバーグ、ベント、そしてJ. ウェブリーといった顔ぶれであった。当時アデンの南海岸やハドラマウトの港はイギリスの支配化にあったため、遺跡や遺跡のある場所でのまったく自由な旅行や研究そして刻文の移動やその研究において、彼らの助けになった。

(注18, 19) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.23

ドイツ人旅行家 ブルッフロデット

ドイツ人旅行家ホルフマン・ブルッフロデット（注20）が、1906～07年にイエメンに到着した。古いイエメンの刻文を撮影し、ドイツに送ることが出来た。

(注20) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.23

デンマーク人の学者 ウォルフ・ホーエル

第一次世界大戦が起きた1914～18年の間に、外国人がイエメンでの旅行を続けることは困難であった。デンマーク人の学者ウォルフ・ホーエル（注21）は、アデンにおけるキリスト教伝道のための学校を閉鎖し、幾つかの考古学的刻文を携えてデンマークへ戻る機会を得た。

その刻文はアデンに滞在している間に、イエメン中から集めてあったものであり、その刻文を持ち帰ることにより、研究者達に偉大な奉仕をもたらした。

(注21) 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン章 P.23

2人の学者 ラトゲンツとフォン・フィッツマン

西暦1928年、2人の学者ラトゲンツとフォン・フィッツマン（注22）が、イエメンに到着した。

(注22) 「古代アラビア史」終章 P.256

イマーム・ヤヒヤーは2人を快く迎え入れ、彼ら2人をハッジヤ地方で行われていた発掘作業における監督官に任命した。従って、彼ら2人の作業は見事に成功するに至った。このことはフワード・フスナイン博士が彼ら2人の事を著書「古代アラビア史」の終章で記述している。

一方、アハマド・ファフリー博士は、著書「イエメン、その過去と現在」（注23）の中で、この2人の学者の旅とイエメンでの彼らの発掘作業、そして彼らが西暦1931年と1932年の間にエチオピア、ハドラマウトおよび北部イエメンへ幾度か旅をしたことについて記述している。

(注23) 「古代アラビア史」終章 P.83

さらに彼らにはイエメンにおける最初の発掘を実行する際に恩恵があった。その発掘は、ハダア地方にあるナフラ・アルハムラーウ、パニ・バフルールにあるギーマーン及びハッジヤ地方で、当時の皇太子であつ

たアハマド（アハマド・ブン・ヤヒヤー・ハミード・アッディーン）の資金提供のもとで行われた。

しかしながら、この発掘は秩序立てられたものでなく、狭い地域で行われたものであった。また同様に次のように付け加えられている。彼らは多くの困難に出会ったために、発掘を継続することが出来なかった。

そして博士は言っている。「彼ら2人は地理学的、考古学的研究の成果を発刊した。これらはイエメンに関して書かれたものの中で傑出したものとして考慮されている著作であり、3巻本の中の2巻目が考古学にあてられている」

そしてフワード・フスナイン博士は、フォン・フィッツマンがほかの研究者達に参加して行った第2回目の旅行について次のように言っている（注24）。

（注24） 「古代アラビア史」終章 P.257

「ファン・ドルモブランとフォン・フィッツマンがやって来て、1931年に行った第1回目の旅行とは別に、1937年に再度の旅行を行っている。彼らは第2回目の旅行で、フォン・ファセルフスキーと協力した。彼らはセム語の知識の為に大なる利益をもたらした」

ここで次のようなことが知られている。即ちズンマール・アリー・ヤフバルとして知られるブロンズ像と子供サーリーン・ヤイブ・ヤフナムの物が1931～32年にかけてハドア地方のアルキーム県のアンナハル・アルハムラー廃墟から掘り出された。前述の2体の彫像の他に2枚の板が発見されたと述べられている。その2枚の板の1つには、前述の2体の彫像ズンマール・アリーの顔であると言われている男の顔が描かれている。また別の板には 靴が描かれている。

ズンマール・アリー・ヤフバルと子供サーリーン・ヤイブ・ヤフナム彫像には2つのコピーがあり、考古学・書籍局に保存されている。これらはドイツからズンマール・アリー・ヤフバルのブロンズ像の破片とともに到着した。それは修復とコピーの為にドイツへと彫像を送った後のことだった。

3人の女性旅行家

G. カートゥーン・トムソン、A. ガードナー、F. シャトラック

1937年に、これらの3人の旅行家（注25）はハドラマウトにつき、考古学的な発見をした。その発見の中には、ハドラマウト地方にあるハリーダの向かい側のアムド地区にある月の神殿があり、それは土を動かした後に発見されたのだった。

また同様に、多くの刻文や古い灌漑施設の中の1つを発見した。そして彼女達は自分達の旅行と研究の成果を1944年に出版した。それからF. シャトラックは幸福のアラビア、イエメンを1人で幾度も旅行し、彼女は自分の旅行について数多く出版した。

（注25） 「古代アラビア史」終章 P.256, 257, 261

旅行家フィルビー

旅行家フィルビー（注26）は、イエメンへの第1回目の旅行を1936年～37年にかけて遂行している。

(注26) 「古代アラビア史」終章 P.256, 257, 261

彼がイエメンに向けて行った旅行は、もっとも危険を伴い、且つ又最も有益であった。かれはジェッダから旅行を始め、アシールを通り、ナジュラーンを経て、シャブアとハドラマウトのタリームへ向かった。

それから彼は家w面の砂漠を歩み続け、そしてとうとうシャジャルへ着いた。そして彼はこの旅行の成果を本にまとめ、1939年にロンドンで出版した。

フィルビーは次に、自らを隊長に、リケンズとその甥のリーベンズを初めとしたメンバーから成る学術調査団を率いて、第2回目の旅行（注27）を1951年に行った。

(注27) 「古代アラビア史」終章 P.256, 257, 261

フィルビーの一行は、この時も再びジェッダから出発した。ターイフ、アブハー、アシール、ナジュラーンを経由し、更にルブウ・アルハーリー砂漠を通り抜け、リヤドに着いた。リヤドからは、車で5000キロ離れた未踏の地に分け入った。

フワード・フスナイン博士は自書「古代アラビア史」の終章（注28）において、こう述べている。

(注28) 「古代アラビア史」終章 P.256, 257, 261

「フィルビーの一行は考古学上重要な碑文、刻文を大量に持ち帰ったが、その中には1万2千点程の文書が含まれており、それらは良好な保存状態の為に転写することが可能であった。またこの文書中には9千点のサムード語で書かれた刻文と3千点のサバア語で書かれた刻文が混じっていた。

更には見過ごすことが出来ない多くの「引っ掻き文字」も含まれていた。この中で最後の「引っ掻き文字」は、書体の変遷を知る上で研究者達に大いに役立った。

前述したフィルビー調査隊一行は、この他アイン・マー近くで、西暦547年当時のアビシニア王国のアブラハに関する刻文を発見した。（訳者注：アブラハ：アビシニア王国[エチオピア]のイエメン総督。キリスト教を奉じ西暦570年にカアバ神殿を破壊するために、象の大群でメッカに襲来。クルアーン第105章「象章」に拠ると、鳥の大群が投じる小石が大雨のように降り壊滅した、と伝えられている。）

続いて調査隊へ、西暦518年当時の刻文も発見している。これは（ユダヤ教に改宗したヒムヤル朝最後の王である）ズー・ヌワース・アルヒムヤリーに関するもので、後に述べるように、イエメンのキリスト教徒等を弾圧した人物である。

フワード・フスナイン博士は前述の書物「古代アラビア史」中の結びにおいて次のように述べている。「この調査隊へ、更に大量の刻文と遺跡を発見している」。そして更に付け加えて「この旅行と、その到達した成果に関する詳細な報告を、彼は公刊している」（注29）

(注29) 「古代アラビア史」終章 P. 261

「イエメン概説史」第1巻P.17-30